

「倭（𠩺）の五王」は太宰府に都していた

内倉武久（九州古代史研究会）

1) 「松野連（姫氏）系図」の証言

「多元の会」の会長をしておられた故高田かつ子さんから「こんな系図があるのをご存知ですか」と、会員の横山さんが「発見」した「松野連（松のむらじ）・姫氏系図」（注1）のコピーを送っていただいた。国会図書館収蔵本（注2）のものと東京・世田谷の静嘉堂文庫収蔵の二つである。

奈良時代、新政権「大和政権」を打ち立てた藤原不比等らは、いかがわしい古代史づくり、すなわち『日本書紀』の編纂を目指して、まず紀氏ら十八の主要氏族が伝えてきた活動の記録や由来の記録である「墓記」を奪った（691年＝持統天皇五年秋七月）。さらに和銅元（708）年には「禁書」を強奪した。多くの氏族はそれぞれの固有の伝承記録を失ってしまった。このため、紀氏一族の誰かが忘備録として残したのがこの系図であろうと考えられる。

この系図から様々なことが分かってきた。『魏略』や『晋書』、『通鑑前編』『新撰姓氏録』など各史書が記すとおり、紀元前473年、中国・揚子江（長江）右岸河口にあった呉国が南側の越国に滅ぼされ、支配者であった姫氏の一族郎党が船に飛び乗って列島へ逃亡してきたのだ。

系図によれば、姫氏（紀氏）の最初の渡来地は「住火の国山門（やまと）菊池郡」、すなわち熊本県菊池郡の山門（現菊池市）だったという。周辺は日本の装飾古墳の産土の地であり、紀、貴（日本書紀）とか木（古事記）、記（稻荷山古墳出土鉄剣銘）、基（地域名）などいろんな漢字で表されている姫氏の当初の本貫地は九州の西北部分だった。

ただ、漂着した紀氏は「呉国の紀氏」だけではなくろう。中国の戦国時代、中国のあちこちに50ヶ国近くあった「紀氏の国」は次々と秦によって滅ぼされた。周王室（姫姓）の分国だ。記録はまだ見つからないが、このうち多くの国の人々は故国を捨てて列島に逃げたのではないかと思われる。故国に止まっても悲惨な運命が待ち受けているだけだからだ。

「倭」は漢音の『説文解字』によって「𠩺」、「奴」は『ト、ド』としか読めない漢字である。「𠩺」は「キ」の音から子音「k」が抜けた形かもしれない。

「ワ」や「ナやヌ」という読みは呉音の読みで間違い、或は政治的意図を持った読みである。「ワ」は関西・（大）和地域を指す。

3～4世紀の『魏略』や『晋書』、『新撰姓氏録』などが伝えるように「卑弥呼の国」は「太伯（姫姓）の子孫」が支配層を形作っていた。列島に逃げてきてから700年近い年月が流れている。新参者の苦難をなめながら、身につけて来た当時のハイテクを武器に列島に先着していた熊曾於族や天族などと連合、分離、そして結婚を繰り返して、完全に「日本列島人」になったのだ。

系図によれば紀氏一族は菊池郡山門から勢力を広げ、3世紀中ごろまでには筑後から筑前大野（大野城市、太宰府市周辺）にまで進出していたようだ。

2) 景行天皇は紀氏の大王

『記紀』や『常陸国風土記』に記す「景行天皇（大帯日子・オシロワケ）」はまず間違いなく紀氏一族の首長だろう。なぜならこの天皇は「纏向の日代宮（ひしろのみや）」、すなわち「樹木の象徴ともいえる巨木（真木→纏）」（注3）に向かい合った太陽がさんさんと輝く宮」という鳥栖、久留米周辺に都を置いていたらしいからだ。

伝説の巨木は都の周辺にあったようだ。巨木の朝日影は佐賀・鹿島の多良岳に、夕日の折は阿蘇山まで届いたという。九州巡視から帰還したオシロワケを朝廷に勤務する百官が、倒れた巨木をまたいで出迎えた（『書紀』『肥前風土記』）という。

「景行天皇」は今も菊池地域の英雄だ。山鹿町・大宮神社の山鹿灯籠祭りはこの天皇の「始めよ」の第一声から始まる。鳥栖市酒殿西町は景行が九州遠征から帰って、疲れを癒すために「遊んだ」ところだという（『肥前風土記』）。今も白濁した温泉が出る地域として知られる。同市には今も真木（まき）町とか、基里（きざと）、都という地名が残っている。隣は基山町である。銅鐸など鑄造工房が残り、神殿風の建物跡も発見されている。

『書紀』に景行が部下を「都督」に任じたと書かれている。事実かどうかは別として、景行らが渡来元の中国の制度に通暁していたことをしのばせる。

『記』では次男の「小碓（オウス＝倭建・ヤマトタケル）」が日向・大隅にいた熊曾於族の首長をだまし討ちにした。が、名前をもらった。さらに近畿、東海、関東にまで足を延ばして勢力を拡大したと記す。この時点では古田武彦が指摘したように熊曾於族（注4）の力は紀氏より上だったことがしのばれる。

系図は途中から熊曾於族の名が繋がっていて、景行の時代も、紀氏より先行して渡来していた熊曾於族との間で九州あるいは列島の支配権をめぐる繰り返しの戦闘が起き、取ったり取られたりしていたことを思わせる。

パワーポイント掲載の地図（国土地理院のものに加筆）は、2世紀後半から4世紀前半ごろの九州における紀氏、熊曾於族、天（海人）族の大方の勢力分布を描いてみたものだ。九州北端の天族の勢力図は、天族が紀元前から2世紀中ごろまでに造った伊都（倭奴）国（○）の都の範囲を示している。

「倭国の大乱」の結果、卑弥呼勢力に国を乗っ取られた伊都国人は散りじりになり、支配層は大和や豊後に逃亡、一部は長野県あたりにまで逃げたのではないかと考えられる。それまで一万戸あった国人（『魏略逸文』）は、千戸にまで激減した（『魏志』）という。

3) 『梁書』の証言

斉の『(南) 齊書』を受け継いで記録された梁の『梁書』には

倭(辛)は自ら太伯の後と云う。・・・漢の靈帝の光和中(178~183年→注5)、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子・卑弥呼を立てて王となす。・・・景初三(239)年、公孫淵が誅された後、卑弥呼始めて遣使朝貢。・・・卑弥呼死して、新しく男王立つも國中不服。さらに相誅殺す。卑弥呼の宗女臺與、

王となる。その後また男王が立ち、(晋などの) 爵命を受ける。

(東) 晋の安帝の時 (397~418 年) 倭王**賛**あり。**賛**死して弟**彌** (ミ?) 立つ。**彌**死して子**済**立つ。**済**死して子**興**立つ。**興**死して弟**武**立つ。齊の建元中、**武**を「(使) 持節・(都) 督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓の六国諸軍事・鎮東大將軍」に叙す。高祖、即位して**武**を「征東將軍」と号す。 () 内は筆者

などと記録する。はっきりと「倭(辛)は自ら太伯の後と云う」と南齊書には見えない新しい尋問、確認に答えた文言を記録している。「倭の五王」が紀氏一族であることがわかる。

そして彼らが太宰府に都していたことは太宰府の別称が「都府楼」であることからわかる。「都府楼」とは「都督の役所の高楼」という意味だ(貝原益軒)。日本の歴史上「都督」に任命された大王は「済」と「武」しかいない。7世紀に「筑紫都督府が置かれた」という記録はいっさいない。

4) 理化学的年代測定値の証言

では、「倭の五王」はどこを拠点にしていたか。それはほぼ間違いなく福岡県の中心部にある太宰府であろう。

九州歴史資料館が、太宰府を守るために造られた水城の下部に設置された「敷き粗朶^{そだ}」(堤下部の補強材)を放射性炭素(¹⁴C)で年代測定している。11層ある敷き粗朶の最下層は240年(中央値)、中層は430年(中央値)、上部は660年(中央値)だったという。また福岡市平和台球場跡で発見された太宰府の外交施設「鴻臚館」のトイレ最下部から出土した注木も430年(中央値)、水城下部に設けられた排水施設「木樋」の測定値も430年(中央値)であったと報告(九州大・坂田)されている。

このことはまず、太宰府は元来卑弥呼が拠点のひとつとして築造を始めた都城だろうということだ。水城と太宰府が最初に造られたのは240年±で、卑弥呼が死んだという247年前後のことだからである。「原太宰府」とも言える都城だ。小生の古代史ブログ(注6)NO.5などでお伝えした通りだ。

五王最初の「讚」が南朝劉宋に遣使したのは421年であった。「讚」は430年前後に卑弥呼が築城した太宰府の都城を造り直し、さらに周辺の日々に山城も造って防御態勢をがっちり固め、拠点としたことが伺える。5世紀が中心の「倭の五王」と年代的にぴったりだ。

紀氏らはもちろん、都城はどうあるべきか、どう建設すればよいかの情報も大陸での経験もふまえて、知識も技術も豊富に持っていたことだろう。太宰府が建設されたのは7世紀後半だとする『日本書紀』(『書紀』)の記述や九州の考古学界的認識はまったくのうそと誤りである。

5) 「常陸の国風土記」の中の「倭武天皇」

最後の「倭(辛)の武」は列島の「史書」にも登場していることを思い出して

ほしい。『常陸国風土記』だ。

この「風土記」の中心にいるのは「倭（辛の）武天皇」で、そのままの名で登場する。びっくりするのは「景行天皇」もこの地を訪れていたという記述だ。もちろん『記紀』にはまったく記されていない。

この「風土記」の中身を見てみよう。

- ①《常陸の国司、解（上申）して申す。古老相伝の旧聞の事》**倭武天皇**、東の国を巡狩し、新治縣（にいはりのあがた）に幸（いで）ます。（派）遣していた国造ヒナラスの命（みこと）に新たな井（戸）を掘らしめるに、流泉浄（きよく）澄み、いと好く愛（うま）し。時に（倭武）、乗輿（みこし）を止めて、水をめで、手を洗う・・・
- ②《筑波郡》古老曰く、筑波の縣は古（いにしえ）「**紀の国**」と謂（い）ひき・・・
- ③《筑波郡》筑波の岳は往き集い、歌舞し飲み食いすること今に至るまで絶えざるなり（歌垣）
- ④《信太（しのだ）郡》大足日子（おおたらしひこ＝大帯彦＝**景行**）**天皇**、浮島の帳宮（かりみや）に幸ます。水の供御無かりき。即ちト者（うらないのもの）を（派）遣し占を問わしめて穿（ほら）しむ・・・
- ⑤《信太郡》古老曰く「**倭武天皇**、海辺を巡幸し、乗浜に行き至る。この時浜浦に多く海苔（のり）乾かせり。是により名をノリハマの村と
- ⑥《茨城郡》昔、**倭武天皇**、丘の上に停留し、御膳を進め奉る時、水部に新しい清井を掘らしむ。出泉浄（きよ）く飲喫にいと好かりき
- ⑦《行方（なめかた）郡》**倭武天皇**、天下を巡狩し、**海北を征平す**・・・よろしくこの地を行細（なめかた）の国というべし、と
- ⑧《行方郡》大足日子天皇（**景行**）、下総の国の印波の鳥見の丘に登り、留連（とどまり）遙かに望む。東を顧みて侍臣に勅し、海は青波ただよい、陸は丹霞（あかいかすみ）たなびく。国はその中にあり朕が目に見ゆ、と
- ⑨《行方郡》**斯貴瑞垣宮**（しきのみずがきのみや）で大八洲所馭（おおやしましらしめし）**天皇**（**崇神天皇**）の時、東の夷（えみし）、荒ぶる賊を平らげんとして、建借間（たけかしま）の命（すなわちこれは那珂国の国造の初祖なり）を遣す・・・
- ⑩《行方郡》**倭武天皇**、巡行してこの郷（当麻郷）を過ぎる。佐伯、名は鳥日子という者あり。その命（令）に逆（さからい）しによりて便随（ついで）に略殺しき・・・天皇の幸にあたりて（寸津比古）、命に違ひ化に背きていと肅敬（いや＝礼）無かりき。ここに御剣をぬきてすなわち斬滅す。
- ⑪《行方郡》**倭武天皇**、この野（ハツムの野）に停宿して弓はずを修理す。よりにて（野の名が）ある
- ⑫《行方郡》**倭武天皇**、相鹿の丘前（おかざき）宮に坐す。この時膳（かしわで）の炊屋舎（かしきや）を浦浜に構え立て、船（おぶね）を編み、橋を作りて御在所に通う
- ⑬《行方郡》**倭武天皇の（皇）后**、**大橋比売**（おおたちばなひめ）、倭より降り来てこの地で（天皇と）会う。故に安布賀邑（あふがむら）という

- ⑭《香島郡》**倭武天皇**の世、天（香島）の大神、中臣の臣・狭山命に「今、社の御船は？」と宣（の）る・・・ここに即ちおそれかしくみて新たに舟三隻、各々長さ二丈余なるを造らしめ、初めて献じる・・・
- ⑮《香島郡》**倭武天皇**、この浜（角折れ浜）に停宿、御膳をすすめ奉りし時、都（すべて）の水なかりき。すなわち鹿の角をとりて地を掘る。その角、折れる。故に名づくといえり
- ⑯《久慈郡》古老の曰く、郡より以南、近くに小さき丘あり。體（からだ）鯨鯢（くじら）に似たり。**倭武天皇**、よりて久慈と名付く
- ⑰《久慈郡》助川の駅家（うまや）あり。昔、遇鹿（あいか）と号す。古老の曰く、**倭武天皇**、ここに到りし時、皇后参り遇（あい）たまう。よりて名づく・・・
- ⑱《多珂郡》斯我（しが）の穴穂宮で大八洲照（おおやしましらしし）天皇（**成務天皇**）の世、建ミサヒの命をもって多珂の国造に任じる
- ⑲《多珂郡》古老曰く、**倭武天皇**、東の垂（すい＝辺境）を巡るとしてこの野に頓宿・・・ここに天皇、野に幸し、橘皇后を遣わして海に臨みて漁せしむ。捕獲の利を相競わんと別れて山と海の物を探り賜いき。この時、野の狩りは終日駆射するも一つの宍（猪）も得ず。海の漁はしばしの間にか採（はかどり）てことごとく百の味を得る・・・
- ⑳《多珂郡》**倭武天皇**、船に乗りて海に浮かび、島（藻島）の磯を御覧。種々の海藻多く生い茂れる。よりて名づく

この風土記には少なくとも計 14 カ所に倭武天皇の行動や事績が伝えられている。⑦「天下を巡狩した」「海北（朝鮮半島）を征平す」と書いているからこの天皇が『宋書』や『梁書』などに記す「倭武」天皇であることがわかる。古田武彦が指摘した。もちろん、倭武天皇が常陸の国に都を置いていたわけではないことは⑬「皇后が倭（い）より降り来てこの地で（天皇と）会う」などの表現からも明らかだ。

「倭武天皇」は『宋書』に記録されているとおり、讚や珍の時代も朝鮮半島の主導権を巡って高句麗と激しい戦いを繰り広げていたことが「広開土王碑文」や『三国史記』などに記録されている。

「武天皇」は長い事「常陸の国」に滞在していたようだ。重要なことは皇后が登場し、しかも「新治の縣」付近は「古（いにしえ）紀の国と言った」と記録していることである。紀氏である「倭（姫）の五王」の進出先であるから「紀の国」だったと考えれば納得がいく。

皇后は「(大)橘姫」という人だという。国史学者はこの皇后を「東の国を平定するために来たヤマトタケルの奥さん弟橘姫だ」と言って来た。「記紀に記される大和政権の天皇以外に列島に天皇はいなかった」と考え、いくら「天皇」「皇后」というはっきりした文言が出てこようときちんと検証することはなかった。「市民だまし」は今も続いている。

久松潜一らが監修した『風土記』（朝日新聞社刊 1960年）も「倭武天皇」には

「やまとたけるのすめらみこと」などとふりがなを打ち、「歴代天皇確定前の通称」などと訳の分からない解説をしている。ごまかしである。

大和政権が造らせた風土記以前に「九州倭政権」が作らせた風土記があったらしい。「乙類風土記」と呼ばれている。『常陸国風土記』は精緻な漢文体で書かれており、また「評」（こほり・多珂郡）とか「新治縣（あがた）」とする記述も残っている（あるいは意図的に残している）から「乙類」の風土記と考えられる。二種類の「風土記」が存在することは井上通泰や坂本太郎が指摘した。乙類の風土記を「九州倭政権」が作らせたものであるとしたのは古田武彦である。

6) 「磐井」天皇は「倭の五王」の跡継ぎ？

では「倭の五王」の次の天皇（大王）は誰だったのか。そしてどこに都していたのか。「それらしい天皇」を探してみると、527年に筑後川の上流にいた継体天皇（注7）に「反逆して滅ぼされた」という「筑後の磐井」が目につく。（継体から後は、以前と違って「二倍年暦」は用いられていないようなので、この年にした）

『古事記』によれば、継体天皇の名は「袁本杼」であるという。「袁（えん）」という字は『記』では「～を」という接続詞として使われている。これを利用して、国史学者らは『書紀』にいう「オホド天皇」（継体）と同じ人であるとしている。

だが、「本」は「ほ」と読んでもあるいはいいかもしれないが、「杼」は「ショ」あるいは「ジョ」としか読めない漢字である。決して「ド」とは読めない。

「継体天皇」の姓は正しくは「袁」で、大陸から逃亡、渡来した「袁」氏の一派である可能性が高い。日中両国で鏡作り技術者として名前が記録されている。「磐井」について『記』では

この（継体の）御世、竺紫（筑紫）の君石井、天皇の命に従わずして多く礼無かりき。故に物部荒甲（あらかい）の大連（おおむらじ）、大伴の金村の連二人を遣わして、石井を殺す

と、それだけだ。が、『書紀』には

ここに磐井、火、豊の二国に掩（おおい）よりて勿使修職（国造としての仕事をしなかった）。外は海路に邀（むかえ）て高（句）麗、新羅、任那の国の職貢船（みつぎものを積んだ船）を誘いこむ・・・

などと書き、継体天皇が物部の鹿鹿火（あらかひ）に命令して磐井を殺した、ということになっている。

「事の成りがたきを恐れて」の「事」が南朝鮮・トクトコンの任那合併問題であるのか、「反逆」のことであるかよくわからない。が、任那合併問題であれば、これは「磐井」天皇が行なおうとした政策らしいとわかる。

人質まで取られていた新羅、百済は当然、倭国に「付け届け」をせよ。だが、敵対していた高句麗が貢物をするということはまず考えられない。「大王」

でもない磐井が「誘った」からと言って、此の国々がそろってだまされた、など考えられない。そんなアホな国家はない。

「九州倭政権」はなかったことにしよう、という『日本書紀』の面目躍如の一節だ。

実際にはどうだったのか。『筑後国風土記』（逸文）では

生平（いけりし）時からあらかじめこの墓（岩戸山古墳）を造りき。俄（にわ）かに官軍動発。襲わんとする間に勢いの勝まじきことを知り、独（ひと）り自ら豊前国上膳（上毛）縣に遁（の）がれ、南山の峻（さか）しき嶺の曲（くま）に終わりき。

ここに官軍、追い尋ねるも跡を失いき。士の怒りやまず。石人の手を撃ち折り、石馬の頭を打ちおとしき。古老伝えて云いしく、上妻縣に多く篤（あつ）き疾（＝不具）あるは蓋（けだ）しこれによるか

と書く。よく知られた話だ。

「磐井は列島の大王だった」。そのことを解き明かすカギの一つになりそうな遺物が、古墳に飾られた「石人」「石馬」などの石造物だ。磐井の墓である福岡県八女市の前方後円墳・岩戸山古墳に「別区」が設けられ、さらに墳丘上にも「石人」や「石盾」など数多くの石造物が設置された。墳丘上の石造物は1964年の豪雨の際、流された墳丘のなかから破壊された状態で露出した（約120体）。この古墳は「石造物供献」の頂点と言ってよい状況だ。

こうした風習はどこで発生し、どんな範囲にあるのか。

まず注目されるのは紀氏が漂着した熊本県菊池市の木柑子（紀公子？）ニツ塚古墳（前方後円墳）だ。ブログNO. 52で紹介した。見られたい。高さ90センチほどの小型の「石人」が複数飾られていた。場所といい、古墳の名といい「紀氏」との関係が伺える。近くの「高塚」にも飾られた。

この古墳の年代を菊池市教育委員会は古墳時代後期、と案内看板に記している。石人があるので岩戸山古墳とほぼ同じ時代だろうという判断もあろう。が、筆者は紀氏発祥の地にある前方後円墳であるから、おそらく200年以上古い可能性もあると考えている。きちんとした理化学的年代測定が期待される。

これまで発見された石造物を供えた古墳は九州などで計32基あるという（熊本県文化財発掘調査報告書、2002年）。

発掘調査が進めばさらに増えるだろう。これらの古墳の多くは磐井が生前から造り始めたという岩戸山古墳と同様、前方後円墳である。円墳もあるが、内容物は共通しているものが多い。装飾古墳であるものも多い。八代市氷川町はこの種の古墳の南限である。氷川の沿岸地域であり、近畿地方などで発掘された九州製石棺にここで造られたものが複数ある（ブログNO. 7参照）。

こうした同じ様式で古墳を飾る風習を持つことから、これが「磐井とか火の君の勢力範囲」を示すものではないか、という意見がある。筆者も大賛成だ。「火の君」とはどのようなルーツをもち、どんな活動をしていたかを探る絶好のデータだ。

また、共通しているのは多くの場合、徹底的に破壊されたり、投げ捨てられているケースが多いことだ。「熊曾於族・継体政権」が「紀氏・磐井の支配」のモニュメントを消し去ろうと企てた結果であろう。

磐井は一人、福岡と大分県境の上膳縣、すなわち「上毛（こうげ）縣」に逃げ、そこで終わった、という。『筑後風土記』の記録は十分納得がいく。「継体」が反乱を起こす以前は磐井らの支配領域であり、そこにはまず間違いなく部下や手塩にかけた皇子らを派遣したと考えられるからだ。

「継体」は大王・磐井の油断をみて急襲（俄かに官軍動発）して勝利をおさめた。磐井は北部九州から中部九州、そして山陰までを直接の支配下に置いていたらしい。しかし、彼が関東地方まで支配していたかどうかについてはわからない。

ただ、埼玉（さきたま）古墳群で発見された辛亥年（471年？）制作の鉄刀には「記（紀）氏」の名が刻まれていて、付近に「紀の国」があったらしいから、この年ごろまでは紀氏が進出していたことはわかる（ブログNo. 40参照）。

関東も「倭の五王」時代まではまず間違いなくこの政権の支配下にあったと考えざるをえない。が、これが磐井の時代まで続いていたかは目下のところ不明としかいえない。可能性は高いが・・・。

『宋書』『梁書』などに記す「倭（辛）の五王」の記録は502年で途切れている。磐井が滅ぼされたのは527年だから、25年の間がある。「倭王武＝磐井」は成立しないことはない。しかし、磐井が武の次、あるいは次の次の「大王（天皇）」である可能性も場所柄から言っても高い。彼の墳墓は筑後にあるが、拠点は太宰府ではなかろうか。彼は「筑紫の国造」ともされるからだ。そして「決戦」は太宰府近くの「三井の郡」（小郡市）だったというから、現在の太宰府に都をおいていた可能性は高い。ただ、「松の連・姫氏系図」に磐井の名はない。「反逆者」という後につけられた汚名を避けたかったのかもしれない。

注1 姫氏は『古事記』では発音が同じ「木氏」と書かれている。姫氏の主要メンバーは「木の公（きみ）」と呼ばれた。この「木」と「公」の字を合体させて「松」と表現したという。「野」は接続詞「～の」の変化形

注2 尾池誠著『埋もれた古代氏族の系図』

注3 『古事記』雄略天皇の項参照

注4 熊襲＝狗奴国（コウドコク＝犬野郎の国）。熊曾於族は中国の少数民族と共通する犬祖伝説をトーテムとしていた。氏族の発祥は飼い犬の盤古と結婚した姫君であるという。「狗奴国」は卑弥呼時代、熊曾於族に攻められて敗色濃厚となった紀氏側が、相手を侮辱したネーミングであろう。「熊」は「輝ける」の意。「SOU」は中国で呉越、楚など指す言葉

注5 「倭国大乱」が終わり、卑弥呼が女王になった時期を指す

注6 『うっちゃん先生の「古代史はおもしろいで」』

注7 小生のブログNo. 13、或はNo.138、No.139など参照

《参考》 「倭の五王」（東海姫氏国） 関係年表

【(史) は朝鮮『三国史記』、『書紀』は『日本書紀』、『記』は古事記】

- 三九七年 夏五月、百済王は倭（キ→姫か）国と和を結び、太子の腆支を人質に入れた（史）
- 四〇二年 三月、新羅、倭国と通好し、奈勿王の子未斯欣を人質として差し出す（史）
- 四〇四年 倭国が帯方界へ侵入。高句麗と戦って敗れる（広開土王碑文）
- 四〇五年 百済太子腆支、父王の死去で国に帰り王となる。倭兵が新羅・明活城を攻めるが敗れる（史）
- 四〇七年 春 3 月、倭国（勝或は藤王？→松野連系図）が新羅の東辺を、夏 6 月には南辺を犯し、百人をさらう（史）
倭国、高句麗の歩騎 5 万と戦って大敗。鎧冑 1 万領を失う（広開土王碑文）
- 四〇八年 倭国王、対馬に軍営を設けて新羅を襲撃しようとする（史）
新羅の都・月城に倭兵が充満していた（広開土王碑文）
- 四一三年 倭国、東晋に遣使、方物を献上『晋書』
- 四一五年 八月、倭国、風島で新羅と戦って敗れる（史）
- 四一八年 讚即位？百済王腆支、使者を倭国に遣わし、白錦十反を贈る。秋、新羅の人質未斯欣逃げ帰る（史）
- 四二〇年 東晋滅び、宋建国
- 四二一年 倭国王讚、宋に司馬曹達を遣わし、方物を献じる『宋書』
- 四二七年 高句麗が丸都から平壤に遷都（史）
- 四二八年 倭国、百済に総勢五十人余の使者を送る（史）
- 四三〇年 倭国王讚、宋に遣使『宋書』
- 四三一年 倭兵、新羅の明活城を包囲（史）
- 四三八年 倭国王讚死去、弟珍立つ。宋に遣使。「都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事 安東大將軍・倭国王」の称号を求める。認められず「安東將軍・倭国王」のみ贈られる『宋書』
- 四三九年 北魏が華北を統一、南北朝時代に
- 四四〇年 倭国、新羅に侵入。百姓を奪う（史）
- 四四三年 倭国王濟、宋に遣使。「安東將軍・倭国王」の称号を受ける『宋書』
- 四四四年 夏四月、倭兵が新羅の首都金城を十日間囲む（史）
- 四五一年 倭国王濟、宋から「使持節・都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」の称号を加えられる。二十三人を軍郡に叙す『宋書』
- 四五五年 高句麗、百済を侵す。新羅、百済を救援する（史）
- 四五九年 倭国、兵船百余隻で新羅の東辺を攻め、月城を囲む（史）
- 四六〇年 倭国王濟死去。宋に遣使『宋書』
- 四六二年 倭国王興、宋に遣使。「安東將軍・倭国王」の称号を受ける『宋書』

このころ紀小弓、蘇我韓子、大伴談、小鹿火宿禰の四将軍を新羅に派遣『書紀』。夏五月、倭人が新羅・活開城を襲い、一千人余を連れ去る

- 四六三年 倭兵、新羅の敵良城を襲う（史）
- 四七一年？ 記（姫）の乎獲居（おわけ）の臣、鉄剣に先祖である大彦からの名を刻み、杖刀人の首（おびと）としてシキの宮（豊前？）に都したワカタキル大王に奉事した根源を記す。但し「辛亥年」は411年の可能性もある（埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘文）
- 四七四年 高句麗、百済を攻め、蓋鹵王を殺す（史） このころ木満致、任那で専横。解任される（書紀）
- 四七五年 百済、扶余を捨てて熊津に逃げ、遷都（史）
- 四七六年 倭国、新羅を襲い、二百人を殺害、あるいは捕虜に（史）
- 四七七年 倭国王興死去。武、宋に遣使『宋書』
- 四七八年 倭国王武、宋に遣使。上表文を出す。「使持節・都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王」を綬号。「百済諸軍事」は認められず『宋書』。宋滅び、（南）斉が建国
- 四七九年 倭国王武、（南）斉から「鎮東大將軍」の称号を受ける。伽耶国王荷知、南斉に遣使、「輔国將軍本国王」を綬号『南斉書』
- 四八二年 五月、倭国が新羅の辺境を侵す（史）
- 四八五年 百済と新羅が和睦、共同して高句麗にあたる（史）
- 四九七年 倭国が新羅の辺境を侵す（史）
この頃、紀生磐、任那に拠って高句麗と通じ、三韓の王たらんとして神聖と称する（書紀）
- 五〇〇年 春三月、倭国が新羅の長峰城を攻め落とす（史）
- 五〇一年 倭国で生まれた百済の「斯摩」が百済王に。武寧王（史）
- 五〇二年 斉滅び、肅衍氏（武帝）が梁を建国
倭国王武、梁に遣使。武帝から「征東大將軍」の称号を受ける『梁書』
- 五〇三年？ 武寧王、倭国王「日十大王年」（仁賢天皇？）と「男弟王」に鏡を贈る（隅田八幡神社人物画像鏡）
- 五〇七年 袁本杼、豊前上座郡（福岡県朝倉市）に都し、天皇を称する（興福寺年代記他）
- 五一一年 倭国、百済に伽耶の婆陀、牟婁など四県を譲る（書紀）
新羅が年号を建て始める（延寿元年）（史）
- 五一二年 倭国、百済に伽耶の4県を割譲する（史）
このころ倭国王・満？『松野連・姫氏系図』
- 五二二（善記元）年 袁王（継体）が年号を建て始める（興福寺年代記）など
- 五二八（正和3）年 継体が磐井を急襲、滅ぼす。紀氏政権終わる（記紀）
- 五三一（正和4）年 継体天皇、太子らと共に死去（百済本記）
- 五三二（教倒元）年 安閑天皇が即位（日本帝皇年代記など）